



Title	Ofelia García先生とMHB学会：その出会いと展望
Author(s)	友沢, 昭江
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2026, 22, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/105093
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《特別寄稿》

Ofelia García 先生とMHB学会：その出会いと展望

友沢 昭江（桃山学院大学名誉教授）

2025年度の研究大会（2025年8月15日～16日）は「トランスランゲージング・クラスルーム：理論から実践へ」をテーマとして開催されました。大会の概要には「多文化多言語の子どもたちが、自らの文化的・言語的資源を自由に活用し、安心して学べる環境を実現するためには、子どもの側に適応を求めるのではなく、教育の仕組みや社会の側が変わる必要があります。本大会では、「トランスランゲージング」の視点から、そのような環境をいかに構築できるのかを理論と実践の両面から検討し、公正で包摂的な教育のあり方を問い直します。」とあり、基調講演（8月15日）には「トランスランゲージング教育論」の提唱者である Ofelia García 博士をお招きし、「言語の脱植民地化とトランスランゲージング教育論：その目的と方法 (Decolonizing Language and Translanguaging Pedagogies: The Why and How)」と題し、世界的に展開されている最新の理論的議論とその教育的インパクトについて、オンラインでご講演をいただきました。

大会では研究発表23本中8本が「トランスランゲージング」をタイトルに含み、その多くは教育実践報告で、対象は子ども、高校生、大学生、移民・難民、実践の場は海外の大学、在外継承語クラス、公立高校、インターナショナルスクール、IBDP（国際バカロレア・ディプロマ・プログラム）、さらに教師の気づきなど、多様な実践例が報告されました。こうした報告などを通して、日本、日本語に関わるトランスランゲージングの理解が深まり、それに基づく教授法が広がることが期待されるとともに、トランスランゲージング教授法がもっとも大切だと考えることを確認し、共有することの重要性も確認されました。研究大会では、García 先生には時差のあるニューヨークから、ライブで基調講演および質疑応答の時間を取っていただきました。

García 先生のお名前は、García, O., & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. (Palgrave Pivot) の出版を皮切りに日本でも注目されるようになりましたが、先生と MHB 学会の関係はそれよりも前の 2007 年から 20 年近く続いており、今大会を一つの区切りとして MHB 学会がこれまで先生からいただいた多くの学びの経験を記しておきたいと考えました。

MHB 学会（当時は MHB 研究会）が初めて先生を講師としてお迎えしたのは 2007 年 6 月の第 14 回研究会（於：桜美林大学新宿キャンパス）で、「学校における多言語環境を目指す取り組み」というタイトルで講演を行っていただきました（『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』第 4 号、2008 年、p.105）。英語話者へのシフトを促進する結果となる過渡的バイリンガル教育から、より豊かな多言語が活かせる学校環境作りへの転換を熱く語っていただきました。この時、先生は一枚の写真を見せ、そこに写るアジア原産のバンヤンツリー (Banyan Tree) は気根（空中に伸びる根）が地面に達して新しい幹となるため、1 本の木が広大な森のように見えるのが特徴で、それが先生が描く multilingualism の基本コンセプトだと話されました。この木は後に出版された García, O. (2008). *Bilingual education in the 21st century: A global perspective* (Wiley-Blackwell) の表紙を飾っています。当時コロンビア大学 (Teachers College) で García 先生の下で指導を受けていた加納なおみ先生 (MHB

学会理事)によると、García 先生はこの頃、初めて訪れたシンガポールの多言語社会の様子を目にして深く感動し、そこに多言語多文化社会のあり方を見たとおっしゃっていたそうです。

ここで少し筆者と García 先生との出会いについて述べさせていただきます。筆者は 1996-97 年に勤務先の海外研修の機会を得た時、社会学的な視点からのバイリンガリズム研究で有名なフィッシュマン先生 (Joshua A. Fishman) に、先生の元で一年間研究をさせてほしいとメールを送りました。先生は、自分は春から秋の気候のよい時には NYC の Yeshiva University で教えているが、秋から冬のニューヨークの寒さは耐えられないので、暖かい Stanford University で教鞭をとっており、継続して一年間の指導はできないので、自分の弟子の中で一番信頼している Ofelia García 先生を紹介するから、彼女にメールを書きなさい、と言われました。早速メールを送ったところ、García 先生から当時の勤務校であった City College of City University of New York (CCNY) は「大半が非白人の学生で、場所もあまり安全なところにあるとは言えないし、設備も充実しているわけではないけれど、活気があって『第三世界』のような勢いがあるので、それでもよければあなたを研究員として歓迎します」とのうれしいお返事をすぐにいただきました。短い文章の中に先生の立ち位置がしっかり表れていて、この方の下で学ばせていただきたいと強く思い、激動の多言語空間であるニューヨーク市 (multilingual apple) で一年を過ごしました。

最初に先生から依頼されたのは、García, O. & Fishman, J.A. (1997). *The Multilingual apple : Languages in New York City* (Mouton de Gruyter) に収録される予定の先生の巻頭論文 “New York’s multilingualism: World languages and their role in a U.S.city” の最終稿の多くのデータや統計資料の確認作業でした。間違いないよう丁寧に読み込むうち、世界有数の多言語都市ニューヨーク市の現実を強烈に実感することになりました。先生が所属する Department of Bilingual Education の学部授業を聴講させていただき、大半が非英語母語話者のバイリンガル学生を熱心に指導する先生の教師としての姿に毎回熱いものを感じました。一方で先生は「どんなに忙しくても疲れていても、毎朝私は論文を書くのよ。」とおっしゃり、その言葉通り次々と著書、編著、報告書などを出されました。学部の授業で採用された教科書は、出版されたばかりの Baker, C. (1996) *Foundations of bilingual education and bilingualism* (2nd ed.) (Multilingual Matters) でしたが、Baker はその中で「García 教授からは、効率的かつ迅速に、情熱的で洞察に富んだ、全面的で友好的な協力をいただいた。快く、気品とやさしさをもって、批判的で建設的なコメントを下さった。学生や同僚に対するやさしさに劣らぬものを、私は日ごと電子メールを通じて受け取った。私は García 教授から学問的なことだけでなく、模範的なご自身の例から多くのことを学ばせていただいた。氏は少数派言語集団が直面する危機にすべてを打ち込み、バイリンガリズムに対して利他的で深い思いやりをもって専念することによって、ご自身の学問的な貢献をさらに高めていらっしゃるのです」と謝辞を述べています (日本語訳はコリン・ベーカー著『バイリンガル教育と第二言語習得』岡秀夫訳・編、viii)。

当時、先生はニューヨーク市だけでなくご出身のキューバや二言語政策をもつウルグアイなどを研究されていましたが、アジアについてはそれほど関心を持つことはなかったとおっしゃいました。しかし、その後、筆者との対話を通じて、モノリンガルのイメージがあった日本の言語状況などに関心をもたれるようになりました。そして、遠いアジアに関してそれほど知識や関心のない学生にも日本の言語状況 (特に教育面) について知らせたいと、私に講義を担当する機会を下さいました。その後、CCNY をお辞めになり、コロンビア大学 Teachers College に移られた時に、コロンビア大学が品川に

開設した東京キャンパスのサマーコースで教えるため、初めて日本に来られました。いろいろ聞いていた日本を実際に見ることができると派遣の要請があった時に行くことを決めたとおっしゃっていました。2007年5月から7月のことでした。キューバ出身の先生やご主人 (Dr. Ricardo Otheguy)、そして娘さんにとっても馴染みのない遠い存在であった「日本」を身近に感じる機会となったようです。単一言語社会のように見える日本も実際は日本語以外の言語話者も多く存在すること、なかでも親に同行して来日した子どもたちの存在に関心をもたれました。

MHB 研究会では、2007年11月と2008年2月には García, O., Skutnabb-Kangas, T. & Torres-Guzman, M. E. (2006) *Imagining multilingual schools: Languages in education and globalization* (Multilingual Matters) を取り上げ、二回にわたる読書会を行いました。MHB 研究会初代会長の中島和子先生が2007年5月にハンブルク大学（ドイツ）で開催された第6回 International Symposium on Bilingualism で、大会参加者たちがこの本を手を歩いているのを目にし、読書会の課題本としてはどうかと提案されたのでした。読書会の成果は12名による全13章の書評として『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』第5号、2009年、42-64に掲載されています。

2014年9月には当時関連学会でもさかんに議論されるようになったトランスランゲージングを取り上げ、その概念を理解し、バイリンガル教育研究と実践に結び付けるための最初のステップとして読書会を行いました。García, O., & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. を始めとし、他に関連する文献4本を取り上げ、うち2本については書評として『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』第11号、2015年、49-61に掲載されています。

2015年3月にはお茶の水女子大学で「トランスランゲージングの理論と実践」と題して García 先生による講演会と MHB 会員による研究中間報告会を行いました（『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』第11号、2015年、p.66）。この分野を学ぶ多くの研究者・実践者にとって、第一人者である García 先生を講師としてお招きした講演会が開催できたことは、大変素晴らしいことでした。海外から著名な先生を招くことは資金面で難しいことですが、この時は東京のインターナショナルスクールが先生を招聘されており、その機会を利用して MHB 学会（当時は研究会）にも来ていただくことができました。先生の下で学位を取った加納先生がお茶の水女子大学におられたことも幸運なことでした。このような貴重な機会を逃さず「生の」García 先生から直接お話いただく機会が実現できたことは、MHB におけるトランスランゲージングの研究や実践を活性化させることにつながりました。また、先生は、日本でバイリンガル教育を冠した学会が存在し、講演会や研究発表を活発に行っていることに強い関心を示され、帰国後に MHB 学会に宛てて励ましのメールを下さいました。

2015年の研究大会は「すべての言語資源を活用したマルチリンガル教育をめざして」をテーマに、「トランスランゲージング (translanguaging) への招待」と題するパネルディスカッションを行いました。研究発表にも「トランスランゲージング」をタイトルに含むものが2本あり、日本においてトランスランゲージングの理論が徐々に認知されるようになりました。

2022年度の研究大会は「3言語（以上）を育てる教育を考える」をテーマに基調講演者としてこの分野で著名な Jasone Cenoz 先生（バスク大学 UPV/EHU）に、「三言語（以上）の習得におけるトランスランゲージングを通じたメタ言語意識の発達」のタイトルで講演（オンライン）を行っていただきました。

2024 年研究大会においては「MHB2025 プレセッション」として「初めての Translanguaging」と「訳者が語る『トランスランゲージング・クラスルーム』の魅力」と題する二つのパネルを開催しました。『トランスランゲージング・クラスルーム』(2024)の原著は García, O., Ibarra Johnson, S. & Seltzer, K. (2016). *The translanguaging classroom: Leveraging student bilingualism for learning*. (Caslon) です。García 先生と、大学院で先生の指導を受けた二名が現場での豊富な経験をもとに、バイリンガル・マルチリンガルな子どもたちの教育を考えるうえでの枠組みとなる「教育学的トランスランゲージング」の理論的視点と実際の授業実践例を合わせて提供する待望の一冊です。日本においてトランスランゲージングに基づく実践を促進するために、この訳書は大きな貢献をもたらすことと信じます。翻訳には MHB 学会の理事が多く参加したこと、原著者の一人が MHB 学会と長年交流のあった García 先生であったこともスムーズに翻訳出版につながった理由だと思います。

考えてみると、García 先生の講演を聴き、著作を選んで読書会を開催し、書評を学会誌に掲載し、2015 年頃からは「トランスランゲージング」について学会を挙げて読書会、研究発表、大会テーマに設定するなどして、日本でも早くからこのテーマに取り組むことができたのも、García 先生との関係があったことが大きな要因だと思います。『トランスランゲージング・クラスルーム』の翻訳本を出版し、2025 年には初めて大会の基調講演者として先生をお迎えし、フロンランナーとしての最新のお話を伺うことができました。ライブの質疑応答にも熱心に応じていただいたのも、先生のお人柄もありますが、先生が MHB 学会の活動に長く共感をして下さっているからだと思っています。

The translanguaging classroom: Leveraging student bilingualism for learning. の第二版が 2025 年 4 月に発刊されました。第二版の著者 3 名は初版と同じですが、初版で García 先生の指導の下にあった 2 名が 10 年の後に研究者として実績を上げて筆頭著者となり、García 先生は退職をされたこともあり三人目となっています。García 先生は超一流の研究者として数々の学術的な賞を受け、高い評価を受けておられますが、後に続く研究者を多く育てると同時に、現場での教育実践や教師養成を何よりも大切にされてきました。第二版では、García 先生は筆頭著者となった教え子たちを誇りに思っておられること、そして教え子たちは将来有望な研究者としての自負を持つと同時に、García 先生への深い敬意を記しています。MHB 学会も García 先生とのこれまでのご縁を誇りに思い、これからも研究と教育実践をともに大切に考え、日本におけるバイリンガル・マルチリンガル教育の発展に貢献していきたいと思っています。

注

- 1) “translanguaging” の日本語表記については、MHB 学会では「トランス・ランゲージング」としていましたが、2023 年 5 月発行の学会誌『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』第 19 号から「トランスランゲージング」と表記しています。
- 2) 『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』は MHB 学会のウェブサイトで一般公開されています。
<https://mhbm.jp/>

引用文献

- ベーカー、コリン. (1996). 『バイリンガル教育と第二言語習得』岡秀夫 (訳・編) 大修館書店
- ガルシア、オフィーリア・ジョンソン、スザンナ イバラ・セルツァー、ケイト (2024) 『トランスランゲージング・クラスルーム』、佐野愛子、中島和子 (監訳) 明石書店
- Baker, C. (1996). *Foundations of bilingual education and bilingualism*. (2nd ed.) Multilingual Matters
- Garcia, O., (1997) New York's multilingualism: World languages and their role in a U.S. city. In Garcia, O. & Fishman, J.A. (Eds.), *The Multilingual apple : Languages in New York City*. (pp. 3-50) .Mouton de Gruyter

- Garcia, O. & Fishman, J.A.(Eds.) (1997). *The Multilingual apple : Languages in New York City*. Mouton de Gruyter
- Garcia, O., Skutnabb-Kangas, T. & Torres-Guzman, M. E. (2006) *Imagining multilingual schools: Languages in education and globalization*. Multilingual Matters
- Garcia, O. (2008). *Bilingual education in the 21st century: A global perspective*. Wiley-Blackwell
- Garcia, O., & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Palgrave Pivot
- Garcia, O., Ibarra Johnson, S. & Seltzer, K. (2016). *The translanguaging classroom: Leveraging student bilingualism for learning*. Caslon.
- Seltzer, K, Ibarra Johnson, S. & Garcia, O. (2025) *The translanguaging classroom: Leveraging student bilingualism for learning*. (2nd ed.) Brookes Publishing.



桜美林大学新宿キャンパス：講演が行われた教室で撮影（2007年）
（ガルシア先生と筆者）